Ⅲ　実践研究

宮崎県

実践研究団体

1　特定非営利活動法人
　障害者自立応援センターＹＡＨ！ＤＯみやざき

2　霧島おむすび自然学校

3　日向市地域福祉コーディネーター連絡会

取組推進校

1　宮崎県立児湯るぴなす支援学校

2　宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校

一緒に体験することが、理解につながる！・・・やどかり

実践研究１

障害者自立応援センターＹＡＨ！ＤＯみやざき
〈宮崎市〉

取組の目的

共生社会の実現に一歩ずつ近づいていくためには、まずは障がいのある人とない人が出会い、どうすれば一緒に楽しめるかなどを話し合いながら、相互理解を深めていく過程こそが重要だと考える。この取組は、障がいの有無に関わらず、そこに参加する人たちが、楽しみながら主体的に関わり、企画・運営していくことで地域の仲間作りにつながり、それが共生社会の実現につながっていくことを目的としている。

取組の経緯

昨年度の取組の反省として、障がいのあるメンバーとボランティアの学生がお互いに知り合うための十分な時間がなく、一緒に楽しみ、次につなげるというところまでは至らなかった。

そこで今年度は、「バリアフリーサークル・やどかり」（以下「やどかり」）という自主グループを、宮崎福祉医療カレッジ社会福祉士学科の学生と YAH!DO みやざきの障がいのあるメンバーとで立ち上げ、宮崎市中央公民館に団体登録し、まずは継続して活動できる拠点を作った。この「やどかり」のメンバーが中心となり、障がいの有無に関係なく共に楽しめる企画として実施したのが、今回の取組である。

取組内容

１　ニュースポーツ体験レクリエーション

（１）学生と障がいのある人との交流と企画・運営についてのグループミーティング

ニュースポーツ体験レクリエーションを全員で楽しむために、障がいのある人が自分のことを話し、その後に３つのグループに分けて、それぞれでレクリエーション当日にやりたい競技や、みんなが参加できる工夫について話し合った。

（２）仮装してのニュースポーツ体験

よりみんなで楽しく盛り上がるために、それぞれがハロウィンの仮装で参加し、話合いの時と同じグループによる「チーム対抗戦」方式で、４つのニュースポーツの種目を楽しんだ。

【グループミーティングによる話合い】

【ニュースポーツ体験レクリエーション】

2　「パラスポーツ体験・交流」（宮崎市ボランティア協会主催）に協力、参加

宮崎市ボランティア協会が主催した「まちなかバリア体験 2022『パラスポーツ体験・交流』」に「やどかり」として協力、参加した。障がいのある人や小学生から大学生までの一般参加者５０名に対し、１で行ったニュースポーツを紹介しながら、交流した。

【スロープも使えるボッチャ】

【おもちゃのバズーカで的当て】

【カーリングに似たカローリング】

成果と課題

（１）成果

・　障がいのある若者とボランティアの学生の相互理解が深まり、仲間作りへとつながった。

・　若者目線で楽しく企画、運営することで、参加者それぞれが主体性を発揮するようになった。

・　自主グループを立ち上げ、公民館に団体登録したことで今後の生涯学習の場所を作ることができた。

（２）課題

・　自主グループで活動を続けていくには、メンバーそれぞれに時間的余裕が必要である。

・　活動の内容によっては、金銭的な負担が生じる場合も考えられ、それをどのように負担していくかも課題である。

今後に向けて

（１）「バリアフリーサークル・やどかり」による、障がいのある人もない人も共に楽しめる講座やイベント

・　ニュースポーツやパラスポーツ体験会を公民館講座で行う。

・　ファッションや美容に関する講座を行う。

・　アウトドアを体験するイベントを行う。

（２）さらなる仲間作り

・　障がいの種別、程度、年齢を問わずに参加者を募る。

・　年齢等を問わずボランティアで関わる支援者を増やしていく。

・　障がいの有無に関係なく、同じ地域で暮らす“仲間”となることを目指す。

障がいのある人たちの自然体験と地域交流～協働による生涯学習のすすめ方～

実践研究２

霧島おむすび自然学校
〈小林市〉

取組の目的

・　障がいのある方が自然とふれあう遊びや地域を知る･楽しむためのウォーキング（フットパス）を楽しみ、地域や人との交流を図ることができるよう支援の在り方について検討する。
・　行政と民間団体との協働事業を通じ、行政はじめ関係機関や団体等との連携の在り方、運営の仕方についてさまざまな知見を得る。

取組の経緯

今回、行政と民間団体との協働事業を行った。コロナ禍のため、行政主導の生涯学習講座としては実施できず、民間団体主導による事業を行うことになった。
事業では、障がいのある方の理解啓発を図り地域とつながること、また活動制限や体験の機会を失っている障がいのある方にとって、自然とふれあい体を動かし人と交流することができる内容を用意した。施設をはじめ、周りに楽しめる環境がある地域で、地区住民の方々や高校生のボランティアに協力を得ながら２回事業を実施した。
実施後は、ボランティア活動の啓発イベントにおいて展示コーナーに出展し、事業の紹介を行った。

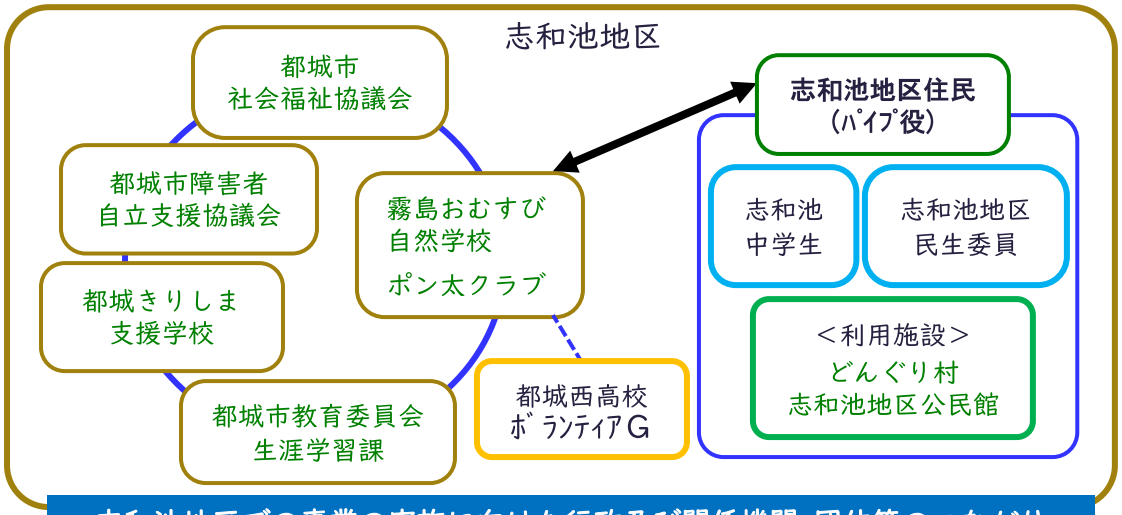
取組内容

１　事業実施に至るまでの活動

（１）ボランティアへの事前学習（ボランティア講習会）

令和４年 10 月 26 日に県立都城西高等学校インターアクト部に対し、同校でボランティア講習会を実施した。フットパスの説明、障がいのある方との関わり方や支援についての講話を行った。予定していた障がい当事者との交流は、当事者の体調不良により実施できなかった。

（２）行政及び関係機関･団体等の地域とのつながり



志和池地区での事業の実施に向けた行政及び関係機関･団体等のつながり

〔行政及び関係機関等の動き〕

都城市障害者自立支援協議会、都城きりしま支援学校、都城市教育委員会生涯学習課は、案内チラシの配布、参加の呼びかけ等、広報活動を主に行った。また都城市社会福祉協議

会は志和池地区担当者を通じ、同地区民生委員への協力依頼等を行った。

（３）事業にかかる地域との関係づくり

志和池地区の人材等を知る住民の協力で、事業関係者との連携のためのつながりができた。

住民の動き～・志和池地区のボランティア経験者等への協力依頼、施設借用等の打診
・事業内容に関わる情報提供等（人材や利用施設等に関する情報）
・ポン太クラブ及び霧島おむすび自然学校との連携（情報共有）

（４）事業の実施主体団体『霧島おむすび自然学校』の活動

現地踏査をもとに、体験場所や活動内容の検討、当日日程と安全管理含む支援体制づくり、活動内容に応じた教材等の準備を進めた。また、ボランティアの志和池地区民生委員の方々と打合せを行った(事業の概要説明や準備物等の確認、当日の進め方等を協議）。

２　事業の実際

（１）ポン太クラブ・霧島おむすび自然学校の共同と都城市教育委員会生涯学習課との協働事業

秋のあじわい体験～どんぐり村で自然あそび！～

◆日時　令和４年１１月５日　9:30～13:30
◆場所　志和池地区公民館、
どんぐり村こども自然塾（都城市上水流町）
◆内容　どんぐり村までウォーキング
ネイチャーゲーム
昼食交流会

参加者：44 名　障がい者:18、保護者 2、幼児 1、事業所職員 4
どんぐり村管理者 2、ボランティア 17

どんぐり植え

深まる秋の志和池を楽しむ“フットパス体験”

◆日時　令和４年１１月 12 日　9:30～13:50
◆場所　志和池市民広場、
どんぐり村こども自然塾（都城市上水流町）
◆内容　志和池地区フットパスウォーキング（4ｋｍ）
（市民広場～科長神社～地区公民館～どんぐり村）
昼食交流会

参加者：55 名　障がい者 12、保護者 3、事業所職員 4
どんぐり村管理者 2、ボランティア 34

（２）　事業及び関係団体の紹介等広報活動の取組

令和５年２月５日（日）に都城市の Mallmall まちなか広場で開催された『ちょこっとボラフェス』（みやこんじょボランティアフェスティバル２０２３実行委員会及び都城市社会福祉協議会主催）の展示部門に７名で参加（コンソーシアム連携協議会委員３名、中学生３名、高校生１名）。展示内容としては、１１月実施の事業報告資料や中学生手作りの展示物の他、ポン太クラブとどんぐり村の紹介文書、県の研究紹介のパンフレット、絵画をプリントした葉書の配布を行った。中学生３名が街頭で展示の案内をしたり、配布物を手渡ししたり等、積極的に活動した。

成果と課題

（１）　成果

ア　どんぐり村の環境のよさ、フットパスという体験内容の魅力

いろいろな樹木に囲まれた森の雰囲気の中でゆったり過ごす気分を味わったり、ネイチャーゲームという自然を感じる遊びを楽しんだりできていた。心が安らぐ時間を過ごせたといった感想が聞かれた。どんぐり村という施設が今回の体験内容にマッチしていた。

フットパスに関しては、高校生や障がい者の方の中に自然のよさや歩くこと自体を気持ちよく感じたり、リフレッシュしたりできたとの感想があった。地域にあるものに触れながらの歩きの楽しさも感じていた。また、職員からは「フットパスが障がいのある方にとって体験しやすい活動である」との声を聞いた。

イ　高校生ボランティアの関わりの成果

障がいのある方は高校生との会話を楽しんだり、側で共に歩いてくれたことをうれしく感じたりしていたようである。職員からは、「体力が心配だった人が最後まで歩き通せて感心した」との感想があった。このことから、高校生が障がい者の方に積極的に関わりながら声かけや話しかけたこと等の効果を感じた。また参加した当事者が高校生と話す経験がないことから、出会いの新鮮さもあって、歩く意欲や楽しい体験につながったということも考えられる。

ウ　志和池地区の方々の協力内容のよさ・適切さの効果

志和池地区民生委員の皆さんからは、「楽しい雰囲気の中で調理の補助ができた」「障がいのある方との交流を楽しみ、料理が完食となった喜びを味わえた」「障がい者の方を知るよい機会になった」「調理活動を通して障がいのある方と交流でき、自分たちの役割を実感した」等の感想があった。共生社会について考える機会を含めいろいろな学びがあり、障がい者理解の意識が高まったといった、ボランティア側の収穫もあった。

志和池中学校の生徒たちは、「志和池地区のよいところの再発見ができた」「障がいのある方と　の交流を楽しく思い貴重な体験であるという認識ができた」「次回の障がいのある方との交流が楽しみである」等の感想があった。今回の障がいのある方との交流を通じ、障がい者理解への一歩を感じたことや自分たちの役割を意識する機会にもなっていた。

エ　地域住民とつなぐ人材の存在と直接呼びかけによる広報活動の重要性

今回の事業を通して地域住民とつなぐ人材の存在の大きさと、直接参加を呼びかける広報の仕方の重要性を認識できた。地域を知る人材が仲立ちをすることで地域住民の構えがゆるくなり、話を通しやすくなることを実感した。同様に、広報においても直接会って案内を渡したり参加を促したりすることで、事業所も利用者への働きかけの意識が高まるのではないだろうか。

実践研究の最後の取組として展示コーナーでの広報活動を行ったが、市民の目に触れる場を生かすことも必要な活動になると改めて感じた。

（２）　課題

・　今回協働事業に携わる中で、行政、関係団体双方の情報交換や事業の進捗状況の確認等が難しかった。事業を円滑にすすめるため、今後は事業運営に関わる立場と役割を意識した行動をとることや関係者双方からの積極的な情報交換が必要である。

・　学校卒業後の情報ネットワークや学校ホームページ活用による情報伝達方法について見直す必要がある。適切な伝達方法の構築に向けた動きが急がれる（昨年度の懸案）。

・　行政と関係団体等の連携において、情報を共有する手段の確保と事業に関わる個人やグループ、団体等の役割に関する検討と整理が必要である。

今後に向けて

（１）　地域の核となる人材の確保

地区を知る住民（キーマン）とのつながりは重要であり、事業に係る必要な情報を双方向でやりとりできる協力関係を築くことが大事である。また、行政や関係機関、団体等は地域との関わりと人材の掘り起こしを積極的に行う必要がある。

（２）　ボランティアの確保と養成

まずはボランティアを体験することが大事である。一方で障がいに応じた支援ができるボランティアの存在は大きい。信頼できるボランティアは新たな支援者を育成する役割を果たせる。安心感があることで、障がいのある方の参加を促し、活動意欲や楽しさを引き出す原動力になる。

（３）　事業の運営主体を中心に、関係者が各々役割意識をもって実働する体制づくり

築いてきた個人や団体等との関係性をしっかりと活かしながら、より具体的な協力の仕方をつくり出す。新たな事業展開につながる知恵や工夫を生み出す期待もある。さらに、企画・運営に携わる当事者間での目的意識、役割意識を高めながら本気度のある取組を進めることは重要である。今回の実践を通じて情報伝達の不備や、情報共有も不十分だったことを踏まえ、しっかりと情報が行きわたる方法及び体制をつくることが肝要である。

（４）　事業の柔軟な運営形態の選択と行政の積極的なパートナーシップの発揮

民間団体その他の組織やグループ等との協働や委託、あるいは各々の自主事業等への行政支援等、事業のねらいに応じて柔軟に運営形態を選択できるようにすることで、より創造的な事業展開が期待できる。また行政には、事業に積極的に関わる姿勢と果たす役割を明確にした具体的な動きとともに、関係者とのコミュニケーションを積極的にとりながら事業を推進することが大事であると考える。

霧島おむすび自然学校
Mail:ikiiki-taiken@nifty.com　Tel:080-6434-5762

ともに学び合う 「ふくし食堂」の新たなチャレンジ！

実践研究３

日向市地域福祉コーディネーター連絡会
〈日向市〉

取組の目的

- これまでの地域福祉実践を基盤に、多機関協働による障がい特性に応じた「学びの場」を提供する。
- 「出会い」と「対話」をとおして、相互理解を図り、知り合いの関係性（新たなつながり）を構築する。
- 新たなつながりをとおして、お互いの想いに触れることで、学ぶ動機や社会参加のきっかけを得る。
- 障がいのある人や家族・支援の想いや日常の地域生活について知る。（障がい理解）
- 実践効果（結果）の検証（実践課題の抽出・整理・可視化）から、障がい特性、地域特性を踏まえた「学習プログラム」の立案や実践に必要なリアルな情報を収集する。
- 多世代・多機関・他分野による地域実践基盤の強化を図る。

取組の経緯

障がいのある人の生涯学習の課題として、特別支援学校卒業後の学びの機会に課題があることから、児童・生徒が在学しているときから地域の中でともに学べる機会を提供することを検討した。

特別支援学校関係者に対する実践の説明及び協同実践に向けて支援協力を依頼し、学校教育活動の現状や児童・生徒が学ぶために必要な支援や環境についての情報（助言）を得た。その情報（助言）を基に、これまで地域において実践されてきた福祉活動（地域福祉コーディネーター、地域福祉サポーター実践）をベースとする「3つの学習プログラム」を作成し、実践に向けて調整を行った。

学習者が主体的に学ぶための動機づけや知り合いの関係（つながり）づくりが必要と考え、最初の一歩として「ふくし食堂」を実践することとした。

取組内容

1 「ふくし食堂」災害対応チャレンジバージョン！

参加者全員が主役の「ふくし食堂」の実践（集う、話す、動く、食べる、つながる）をベースに、防災教育の要素を取り入れた野外での学習活動を企画・実施し、ともに学び合うための人と人の関係づくり（つながり）や災害時の対応力（生きる力）を高める学びの機会を提供した。

「ふくし食堂」 参加者38名
幼児から高齢者まで、多様な世代の参加

日時：令和4年12月11日（日） 10:00～13:30
場所：日向市サンパークオートキャンプ場

○ 学習プログラム（展開）

① オープニング（30分）

実践の趣旨・目的の説明を行い、障がい児者の学びの現状（生涯学習課題）について、参加者と共通認識（理解）を図る。また、障がいのある子どもを育てる家族の動画を視聴し、「障がい」についての理解及び当事者や家族、支援者の想いに触れる。

「障がい」についての考える
当時者、家族・支援者の「想い」に触れる

② 野外学習活動（90分）

災害発生時を想定のもと、限られた道具・物資（そこにあるもの）を使って、3つの学習プログラム（火おこし／ハイゼックス炊飯／仲間づくり）にチャレンジする。（Point：話す、知る、考える、動く、つながる、学ぶ）

③ 昼食・交流（60分）

ハイゼックス包装食（アレンジ食）を実食する。食事や対話をとおしての新たな関係づくり（つながりづくり）を行った。

④ エンディング（30 分）

参加者の感想や想いを共有し、振り返りシートの記入をとおして、実践結果（効果）の言語化・可視化を行った。

「火おこし」

「ハイゼックス炊飯」

活動をとおして相互に知り合う！学び合う！

2 実践に係る関係機関との協議、調整

※ 実践基盤充実・強化（実践ネットワーク構築）

「ふくし食堂」実践に係る仕込み（事前調整）として、関係機関に対して、以下の調整を行い、合わせて実践基盤の充実・強化を図った。

- ○ 実践目的・目標の説明及び支援協力依頼
- ○ 協同実践に向けての情報提供（共有）及び実態把握
- ○ 学校教育における児童・生徒の学習の状況確認
- ○ 学ぶために必要な環境についての調査（リスク管理）
- ○ 実践プログラム提案・検討・協議
- ○ 案内文書の配布や参加依頼（調整）
- ○ 必要備品・物品の調達（購入）

「実践に係る協議・調整」

地域福祉コーディネーター・サポーター会議
オンライン活用

成果と課題

（１）成果

既存の地域福祉実践を活かした多機関、他分野、多世代による協同実践により、双方の学びの場と新たな関係づくりの場（つながり）を提供することができた。実践することで、障がい特性や地域特性に応じた生涯学習の実践課題が明確になり、これからの具体的な実践イメージを得ることができた。

実践に向けた関係機関との協議や調整の機会をとおして、生涯学習の社会的課題を共有し、課題解決に向けた実践への理解や協力を得ることで、地域における実践基盤を充実・強化することができた。

（２）課題

「学び」に係る情報発信・収集及び相談対応（支援）の仕組みが必要であり、その役割・機能を果たす行政的な機関を明確にする必要がある。また、領域や分野を超えて課題解決に向けて、人と社会（環境）に働きかけることができる専門機能を有する実践者の育成と確保が急務である。そのための財源確保も課題となる。実践ネットワークから踏み込んだワークネットとしての機能の充実・強化が重要である。

今後に向けて

特別支援学校在学中における地域での「主体的な学びの場」の創出・充実を目指す。

- ▸ 児童・生徒の「やりたい」「学びたい」（主体的な想い）をカタチにするための多機関、他分野、多世代協同による地域福祉実践を継続する。

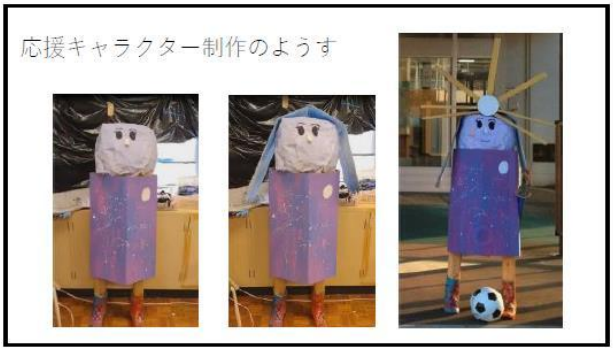
日向市地域福祉コーディネーター連絡会（通称：おせっ会）
☎0982-52-2572 （事務局 日向市総合福祉センター内）

○ 取組推進校

1 宮崎県立児湯るぴなす支援学校

1

2



3

4

5

6

②運動する楽しさ
～体育館でサッカー体験～

かなり盛り上がりました。生徒の白熱した姿を見ることができました

児湯るぴなす支援学校

7

～③余暇活動や卒業後の過ごし方～

○選手へのあこがれ、自発的に「お礼の手紙や、試合応援グッズを作りたい」と生徒

○交流後、昼休みにサッカーをすることが流行中

児湯るぴなす支援学校

8

今後の課題・取り組み

・「ヴィアマテラス宮崎」はサッカー教室を運営されている。本校敷地の隣に「ヴィアマテラス宮崎」のグラウンドができつつある。そこでのサッカー教室の運営に合わせ、本校生徒も教室に入らないか、希望者を募ってはどうか。

ー本校の同好会の時間

児湯るぴなす支援学校

9

RUPINASU_ART

児湯るぴなす支援学校インスタグラムにて、美術作品や他の大型キャラクターも見られます。
是非フォローをお願いします。「ヴィーなす」の今後の活躍もアップロードしていきます。

10

2　宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校

1

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校

- ○ 西臼杵唯一の特別支援学校（分校）
- ○ 対象障がい種：知的障がい、肢体不自由
- ○ 高等部のみ設置（２年生：１名、３年生：５名）
- ○ 平成２０年度 高千穂高等学校の敷地内に開校

2

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校

教育目標

「心豊かでたくましく地域社会で生き抜く力の育成」

○ 少人数編成を生かし、個に応じた細かく且つ柔軟な教育実践を行うとともに、地域の特色を生かした交流及び共同学習を展開することにより、地域社会で生き抜く力を育てる。

高千穂高等学校と年間７０～８０時間の交流及び共同学習を実施

3

田植え交流

4

神舞祭(じんぶさい)［文化の部］

5

神舞祭(じんぶさい)［体育の部］

6

畜産交流

7

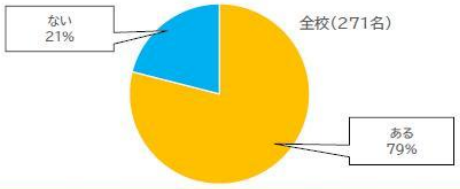
世界農業遺産調べ学習

8

パラリンピック共同採火

9

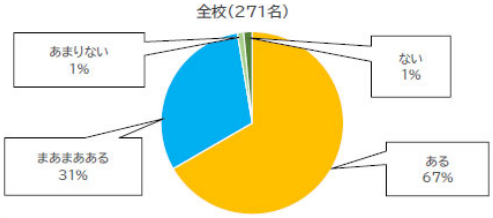
入学後、延岡しろやま支援学校高千穂校の生徒と挨拶や会話をしたことがありますか。



○ 全校生徒の8割近い生徒が挨拶や会話を交わしている。日常的に交流が行えているといえる。

10

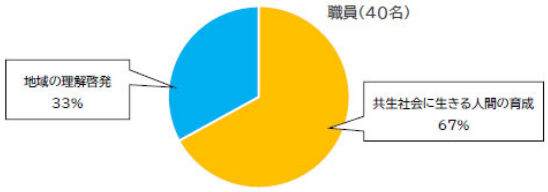
延岡しろやま高千穂校との交流は意義があると思いますか。



○ 3カ年の交流を積み重ねることを通して、多様性や共生社会について、より深く考えているのではないかと考える。

11

高千穂高校にとって、どのような意義があると思いますか。



○ 生徒たちが、地域社会で共に豊かに暮らせるよう、関係機関との連携を一層深め、センター的機能の充実を図っていく。また、積極的な情報発信を行い、地域への啓発も進めていく。

12

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校
令和５年度「共生コース」設置に向けて

地域の仲間と共に学ぶ、特色あるカリキュラム
高千穂高等学校と年間７０～８０時間の交流及び共同学習を実施

県指定研究『夢×人×地域「社会とつながる特別支援学校」推進事業』
令和元年度～３年度「共生コース」の実践研究

令和４年度 開設準備、**地域への啓発・共生社会実現のメッセージ発信**
『共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業』

共生コース開設セレモニーの実施

13

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校
「共生コース」開設セレモニー

○ しろやま高千穂校生と高千穂高校生（神楽保存会）
共同神楽演舞

○ しろやま高千穂校生・高千穂高校生（生徒会）
詩の朗読・共同手話歌披露

○ 両校生徒代表のことば

○ 「共生社会実現に向けての誓い」

14

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校
「共生コース」開設セレモニー

○ **しろやま高千穂校生と高千穂高校生（神楽保存会）**
共同神楽演舞

○ しろやま高千穂校生・高千穂高校生（生徒会）
詩の朗読・共同手話歌披露

○ 両校生徒代表のことば

○ 「共生社会実現に向けての誓い」

15

高千穂高校神楽保存会・しろやま高千穂校生

16

17

下川登神楽保存会 会長 佐藤 英記 氏

地域で神楽保存に取り組んでいる。ブラジルや国立能楽堂など、各地で神楽を披露している。高千穂高校神楽保存会の指導も行っている。

18

19

20

21

22

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校
「共生コース」開設セレモニー（来賓）

- ○ 県教育委員会（生涯学習課、特別支援教育課）
- ○ 高千穂町・五ヶ瀬町・日之影町 教育長
- ○ 両校PTA代表、学校評議員・学校運営協議会代表
- ○ 西臼杵小中学校校長会 会長
- ○ 西臼杵子ども・障がい者ネットワークセンター長
- ○ 西臼杵地域障がい者自立支援協議会 会長
- ○ 下川登神楽保存会 会長

地域の新聞、西臼杵各町の広報担当に取材依頼 ⇨ 地域へ啓発

23

両校 校長　挨拶

佐藤氏による神楽紹介

24

神楽共同演舞

25

神楽共同演舞

26

成 果

○ 交流及び共同学習に、生涯学習支援の観点も加えることができ、充実した教育活動を行うことができた。

○ 地域でともに学ぶ仲間と一緒に地域の伝統文化を学ぶことができた。このことは、障がいのある、ないに関わらず、共に学び続ける生涯学習につながる貴重な経験になった。

○ 就学期から卒業後にわたる、共生社会実現へ向けての生涯学習支援の重要性をあらためて知ることができた。

27

課 題

○ 社会自立のために、就労への支援に加え、余暇や生涯にわたる学びへの支援も保障する必要がある。生涯学習に関する地域の情報を収集整理し、情報提供を行っていく必要がある。

○ 地域の生涯学習に携わる方々への啓発もあわせて行っていく必要がある。このことが、障がい者の充実した社会参加・生活につながり、さらに共に学び、共に生きる社会へとつながっていくと考える。

28

御静聴ありがとうございました

地域の仲間と、共に学び、共に生きる

『共生コース』開設の取組

共に学び、生きる共生社会コンファレンス
ひなたのつどい
「取組推進校発表」

宮崎県立延岡しろやま支援学校高千穂校

29